

農作物の生産を通じた高齢者の居場所づくり

平成31年地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：農作物の生産を通じた高齢者の居場所づくりと地域活性化

研究代表者：総合政策学部 教授 吉野英岐

研究メンバー：猪又博史、山口政義（釜石市唐丹公民館）

キーワード：中山間地域・農業活性化・高齢者

▼研究の概要（背景・目標）

本研究では、東日本大震災の被災地における高齢者の居場所（生きがい）づくりを目指して、農業生産活動や販売活動を活性化させることで、高齢者が安心して暮らすことができ、いきいきと周囲とともに活動できる持続可能な地域社会の構築に資する取り組みを実施し、その効果を検証する。

▼研究の内容（方法・経過）

5月26日に岩手県立大学の3・4年生9名と教員で田植え作業に参加した。さらに10月5日には、3年生7名と教員で稲刈り作業に参加した。両日とも参加した学生もあり、地元の方々と交流しながら、作業を行った。さらにこれらの活動を踏まえて研究者が現地にさまざまなアドバイスを行った。

成果1 高齢者・被災者の居場所づくりと耕作放棄地の解消

田植え作業



年間を通じたイベントの展開により、参加者にとっては貴重な機会を提供できていると考えられる。大学としての関与は学生の参加が中心であるが、春と秋のイベントに参加したことで、地元の参加者にとっても、学生にとってもコミュニケーションを図ることができ、参加意欲の向上につながったと考えられる。耕作放棄地の解消については、継続的な利用により、限られた面積ではあるが、農業がおこなわれたことが確認できた。少なくとも放棄地の拡大を抑える効果がみられた。ただ圃場の整地には大きな労力が必要で、その労働力の確保が課題になっている。今後はこうした部分にも学生の参加を検討するなど外部の人材の協力体制の構築が課題である。

成果2 農作物の生産拡大と地域経済の循環

稲刈り作業



唐丹公民館の企画により、10月6日と12月1日に収穫物の即売会が実施され、学生の参加はなかったが、地元でとれた農産物の地域循環や地場消費が初めて実現できた。また販売して得た収益を今後の活動継続の資金にまわすこともできた。このように、高齢化の進む被災地で、農作業イベントを実施することで、参加者の居場所をつくりつつ、耕作放棄地を解消し、あわせて循環型の地域経済をつくる取り組みは小規模ではあるが、住民や地域の活性化に寄与するところが大きいと考えられる。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 地域活動の拠点として公民館の役割をさらに検証し、評価する枠組みづくりの確立
2. 学生や外部人材のイベント参加の継続的な確保とイベントの自律的な運営体制の構築

【謝辞】 調査研究にご協力いただいた唐丹地区の方々と関係機関の皆様には謝意を表します。